

幕末明治の写真師列伝 第百回 宮下欽 その二十二

総督府の会議所より「横田村一ノ沢より二里ほど山上に一軒家あり、ここに会津藩兵、山内大助、小沼源蔵ほか一名が潜伏しており、これを捕縛すべし」との命があり、松代藩五番小隊より5名を出し、それに松本藩から5名が加わって、捕縛に向かうこととなった。現地に行くとするに2名は自刃して果てており、その他の1名も瀕死の状態であったため、この者は止血めをして、分捕り品と共に持ち運んで、会議所へ差し出した。

10月3日、会議所より若松南方の山地にいる残敵掃討中の各隊に対して、「賊徒悉く降伏し、残敵も霧散したるにより各隊本営に帰休の準備すべし」との命がされた。これにより松代藩は坂下に集結して、この坂下より徐々に越後新発田の本営へ向けて出発することとなった。10月3日、松代藩の帰藩第一隊は、総括副隊長、小旗内膳の指揮のもと、二番小隊、五番小隊、五番狙撃隊、六番狙撃隊、七番狙撃隊が出発する。10月4日午後、若松城の官軍への引き渡しが行われた。この日、松代藩の帰藩第二隊は、総括隊長、河原左京の指揮のもと、三番小隊、四番小隊、八番狙撃隊、大砲隊(12隊)が出発する。10月7日、一番小隊、六番小隊と諸役付属、本営残余の人員が出発する。

会津南部では佐川官兵衛率いる会津軍の戦闘がまだ続行されていたが、25日に若松から正式な降伏状が届き、翌26日に大内にいた佐川官兵衛率いる会津軍の部隊が海隊隊。続いて田島や伊南方面の諸隊も帰順し、謹慎所の塩川へ向かった。

松代藩の帰藩各隊は、越後街道から鳥居峠を越えて、若松街道に出て、それより津川から安田に出て、笹神を経て、越後新発田の総督府、本営に到着した。(10月22日全員到着) 10月24日、残務のための一部の人員を除き、松代藩兵全隊員は新発田を出発して松代に向かう。北国街道を行進して5日後の10月29日、全員は赤坂で千曲川を渡船し、道島へ進み、そこより馬喰町から二列になって紙屋町木戸を通過して大手口より大御門外へ出て、下馬して、総括隊長、河原左京以下、お玄関前を通して、藩主、真田幸民の立つ御飯屋前通りで整列して、藩主に凱旋の報告を行った。その後、藩主より全員へ御酒が下された。また松代以外の在所より出兵した兵たちは、その夜は松代に泊まり、その宿賄一切の費用は藩が負担した。11月12日、総括隊長、河原左京に対して、朝廷からの御召しにより参朝し、酒肴を賜り、御太刀料として金百両が下賜された。また、参謀、岡野弥右衛門、近藤民之助に対しても御召しにより参内し、酒肴料を賜った。さらに翌明治2年6月2日、藩主、真田幸民は御召しにより参内し、賞典禄三万石を賜った。これにより松代藩の戊辰戦争参加は全て終わる。松代藩の参戦回数は大小90余回、参加兵員は3271人、戦死者は52人、負傷者は85人であった。また松代藩の使用した軍用金は莫大な金額で、この当時の藩債は百一十萬両にも達し、藩財政は悪化、さんざんな状態になった。そのため松代藩では明治3年(1870)に松代騒動が勃発した。そして翌明治4年(1871)には廃藩置県により松代県となり、その後、長野県に編入された。しかしながら松代藩の働きは、総督府参謀の山県有朋から「頼みと相成

候は松代藩のみにて、持口持口を任せ置き、尽力憂奮何とも関心の儀御座候」(松代藩兵は信州第一の精兵のみならず、国内における精兵なり)と激賞されるほどで、この時の戊辰戦争従軍兵士の活躍は、明治新政府から松代藩の印象を好転させ、松代藩士の中央進出に際しても大きく寄与することとなった。明治2年(1869)12月29日、宮下欽次郎も御賞典二拾五石を賜っている。さて、ずいぶん回を重ねて書いてきたが、宮下欽次郎の前半生はこのような戦いの人生であった。

藩主、真田幸民は、戊辰戦争から帰藩した全兵士を文武学校内の兵制士官学校に入学させる。この兵制士官学校は、文武学校(藩学校)が手狭につき一時、長国寺に兵制士官学校を設けられていた。それは、慶応4年(1868)6月のことであるが、実際に授業が行われたのは、明治2年(1869)1月11日からである。総督に岩崎玄蕃、教官として武田斐三郎らを招き、洋書やフランス兵制を講義した。田中貞夫『松代藩兵制士官学校関係資料(其の二)』によれば、この松代藩兵制士官学校の生徒名簿に「兵学修業 宮下欽次郎」の名がみえる。戊辰戦争後、宮下欽次郎は松代藩兵制士官学校(松代士官学校)で兵学修業をしていたのである。ここでまたちょっと文武学校について述べれば、明治2年(1869)文武学校を藩学校に改める。翌明治3年(1870)、藩内に松代騒動が起こり、明治3年(1870)12月、長国寺の兵制士官学校は閉校となる。そして、明治5年(1872)に藩学校内に新たに西洋兵学寮士官学校を設け、洋学とフランス式訓練を行うも、廃藩につき半年あまりで全て閉校した。

ここで武田斐三郎がどうして松代藩に招かれたかと述べておきたい。武田斐三郎(後に成章と改名)は文政10年(1827)9月15日、伊予国喜多郡大洲村字中村(現大洲市)に大洲藩士武田勘右衛門敬忠の次男として生まれた。長じて緒方洪庵の緒方塾で学び、さらに大坂から江戸へ出て伊東玄朴の象先堂に入り、この塾で蘭学の他に英語、仏語も学んだ。さらに西洋兵学に興味を持つようになり、佐久間象山の門下となる。ここで砲学を習得する。佐久間象山が吉田松陰に送別の詩を送ったことから松代に塾居した後は、箕作阮甫の箕作塾に入門した。このことが武田斐三郎の運を開いた。箕作阮甫は蕃書調所教授職となり、後の文久2年(1862)幕臣となった蘭学者で、この箕作阮甫が多くの門弟の中から、嘉永6年(1853)の露国使節プチャーチンの長崎来航の際に随伴させることになったのが武田斐三郎であった。これがきっかけとなって、武田斐三郎は嘉永6年(1853)、幕臣となり、長崎に行く。翌安政元年(1854)には、箱館奉行配下(諸術調所教授役)となり、松前蝦夷地へ御用として出張し、箱館ではペリーに応接する。この箱館時代に命じられたのが、台場(弁天台場)及び五稜郭の普請掛であった。元治元年(1864)武田斐三郎は開成所教授役となって江戸へ転任する。さらに大砲製造所頭取に任命、王子反射炉建築御用を命じられる。慶応2年(1866)4月、大砲差込役頭取に任じられ、施錠砲の鑄造をする。慶応3年(1867)5月、砲兵頭に任命され、器械製造並びに弾薬製造御用も兼任することとなった。(森重和雄)